

### テレマン:《無伴奏オーボエのための 12 の幻想曲》より 第 9 番

原曲の《無伴奏フルートのための 12 の幻想曲》は、1732～33 年、テレマンのハンブルク時代の作とされる。この第 9 番は、ゆったりとしたアフェットウオーソ(優しく)に始まり、付点リズムが特徴的なアレグロ、わずか 4 小節と短いグラヴェ、明朗なヴィヴァーチェの 4 部からなり、緩／急／緩／急という教会ソナタのスタイルを採っている。

### モーツァルト:オーボエ四重奏曲

マンハイムの名オーボエ奏者フリードリヒ・ラムとの交流から、1781 年に作曲。ソナタ形式の第 1 楽章は、軽快なアレグロのテンポにのって、オーボエが瑞々しく歌い始める。アダージョの短い第 2 楽章は、イタリアのバロック協奏曲を想わせる哀愁を帯びた典雅な世界。オーボエのヴィルトウオーソが発揮される終楽章アレグロはロンド形式。ここでモーツァルトは定石を破り、冒頭部分を回帰させることなく静かに曲を閉じる。

### ハイドン:弦楽四重奏曲 第 1 番

68 曲にも及ぶハイドンの弦楽四重奏曲の最初の曲であり、フュールンベルク男爵に招かれていた頃、1750 年代後半(ハイドンが 25 歳前後)に書かれたとされる。作曲家自身は初期の弦楽四重奏曲を「4 声のディヴェルティメント」と呼んでおり、本曲もメヌエット楽章が 2 つある全 5 楽章構成。《狩》という愛称は、冒頭楽章のユニゾンで奏されるファンファーレがもとになっている。

### フィンジ:間奏曲

ジェラルド・フィンジは 20 世紀前半のイギリスの作曲家。文学にも造詣が深く、歌曲・合唱曲の分野で評価が高い。本曲は 1933～36 年にかけて、オーボエと弦楽四重奏のために作曲され、イギリスの 20 世紀前半を代表するオーボエ奏者レオン・グーセンスに献呈された。どこか荒涼としたような独特の心象風景がひろがる隠れた名作である。

### 武満 徹:アントウル=タン

タイトルは仏語で「あいだ=時間」という意味で、トリストラン・ツアラの同名詩集から採られている。1986 年、イーストマン音楽学校から委嘱され、オーボエ奏者リチャード・キルマーとクリーヴランド弦楽四重奏団のために作曲、同年、彼らによって初演された。作曲者によれば、曲は夢に似た構造を持ち、夜を薄明に向かって進むように、ディテールは明晰でありながらも、その「非現実的な連続」によって多義性を深めていく。

### モーツァルト:オーボエ五重奏曲

《後宮からの誘拐》を書き上げたモーツァルトは 1782 年、リヒテンシュタイン侯のためにセレナード第 12 番《ナハトムジーク》を作曲した。モーツァルトのセレナードで唯一、短調で書かれたその全曲を 1787 年に弦楽五重奏曲第 2 番に編曲。そして、この弦楽五重奏曲の第 1 ヴァイオリンをオーボエで演奏するのが本曲である。4 楽章からなり、ソナタ形式の第 1 楽章アレグロは、重々しい暗さで幕を開けるが、第 2 主題は明るい幸福感に満ちて対照をなす。第 2 楽章アンダンテは、温もりを感じる優しい旋律。第 3 楽章はカノン風メヌエット。第 4 楽章アレグロは、哀愁漂う主題と 8 つの変奏からなるが、最終変奏で突如ハ長調へと跳躍し、明るい気分のままコーダに突入して終わる。